

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19520091
 研究課題名（和文） 中国隋初期仏教美術様式、形式という新概念の成立
 研究課題名（英文） The Formation of a New Conception of the The Early Sui and Form of Buddhist Arts
 研究代表者
 八木 春生（YAGI HARUO）
 筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授
 研究者番号 90261792

研究成果の概要（和文）：589年に隋によって中国再統一が果たされた。しかし仏教美術の場合、南北の分裂が解消されたことで、すぐにも統一的な様式や形式が出現したわけではなかった。本研究では、各地の地域性の強い仏教美術が融合し始めた時期を「隋初期仏教美術様式、形式」と呼ぶ。そして新しい時代概念を設定することで、中国全土に統一的な仏教美術様式、形式が出現する下地が形成された時期の重要性を評価することが主たる目的である。

研究成果の概要（英文）：598 China was united again by Sui and the disruption of South and North was settled. But that did not bring the immediate unification of the style and form to the Buddhist arts. It was in early Sui that local Buddhist arts with strong peculiarities began to be unified. Therefore we characterize the period with concept of the early Sui style and form of the Buddhist arts and, thus establishing a new conception of the period, we evaluate the meaningfulness of the period when the base was given to the formation of the unified style and form of Chinese Buddhist arts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：美術史

キーワード：隋初期、仏教美術、統一様式、形式、地域性

1. 研究開始当初の背景
 隋が589年に南北朝時代を終結させたことにより、中国の東西のみならず南北分裂状態が

解消された。北朝（北齊、北周）と南朝（陳）の文化が融合し、仏教美術における統一様式、形式が形成される準備が整えられたと考え

られる。しかし長期間かけて形成されてきた地域性は簡単には消滅せず、文帝が仁寿年間（601～604年）に3回に亘り中国全土111ヶ所に舍利塔（しかもそれらは中央から送られた図面に基づいていた）を建設したことで、ようやくそれが形成される兆しが見られた。実際600年以前の造像については、北斉～隋様式、あるいは北周～隋様式などといった曖昧な表現のなされることが多く、中国各地では引き続き、独自の様式、形式を備えた美術が展開していたと認識される。さらに文帝を継いだ煬帝による高句麗遠征の失敗などによって、613年間以降各地で大規模な反乱が起きたことが、隋統一様式、形式の形成を難しくしたというのが、これまでの隋仏教美術の理解であった。

2. 研究の目的

だがその時期、それぞれの地域の仏教美術様式、形式が、以前とまったく同じで変化がなかったかとするのは間違いである。例えば同じ北斉の領域でありながら、山西省太原付近の天龍山石窟では隋開皇4年（584）に造営された第8窟造像に、それ以前にはほとんど見られなかった北斉の首都鄴の流行形式を多く指摘できる。隋の中国統一をきっかけとして、鄴における仏教美術の流行様式、形式が、旧北斉の領域内部のみならず北周領であった地域にも一気に伝わった。それにより各地で、鄴仏教造像に代表される北斉仏教美術との融合が促進したことは、中国各地の仏教造像の様式、形式上、重要な転機となったに違いない。北斉の仏教美術は、とくに梁武帝崩御の557年以降、仏教文化大国であった南朝を凌いだと考えられ、それゆえ隋以前から北朝内で影響力を持っていたと思われる。しかしなにより注目すべきは、このように地域性が弱められていった結果、中国各地で鄴以外の地域の流行様式、形式も受容され易い土壌が出来上がったことである。そしてそれが、中国全土に統一的な仏教美術様式、形式が出現するための下地となったことを明らかにする。

3. 研究の方法

隋以前、北斉、北周時代、それぞれの領域各地でいかなる仏教美術が展開していたかを明らかにし、個別の編年をおこなう。具体的には前者として、北斉の首都であった鄴付近で造営された南北響堂山石窟および、鄴付近から出土する北斉単独造像（白玉像）、山西地方の太原に開かれた天龍山石窟北斉窟、山東青州龍興寺址から出土した北斉造像を対象とした。また後者では、甘肅省天水の麦積山石窟北周窟、敦煌莫高窟北周窟を取り上げた。そしてそれらの影響関係を考察し、また隋時代初期、旧北斉および旧北周の領域各地

において造り出された仏教造像をそれらと比較することで、鄴の北斉仏教美術が、隋時代に入り、各地にいかなる影響を与えたか、そしてそれが仏教美術の統一的な様式、形式の出現のための下地となったことを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 如来像

隋時代になり鄴周辺を除く華北地方の各地で顕著になるのは、鄴北斉如来像の諸形式であった。そこで展開した如来坐像の諸形式は、山西地方など旧北斉領のみならず、若干遅れて旧北周領へと伝えられた。敦煌莫高窟では、第2期諸窟で西安隋造像の影響が色濃く現れた像とともに、（胴部が長く短い裳懸座を持つなど隋時代の特徴が現れているが）箱形の膝や、左脚の真上に載せた右脚の輪郭線が斜めに強く表現されるなど、鄴北斉造像の影響を示す形式が第419窟などで出現した。麦積山石窟でも、隋時代初期に開かれたいくつもの窟で、北斉の流行形式を備えた像が造られた。そしてこれは、現在遺品が知られていないものの、その時期の西安仏教美術の様相を反映していると考えられる。

このように鄴北斉仏教美術の諸形式が、隋の統一により中国全土で広がったことで、統一的な如来像形式が確立される下地が出来上がったのである。しかし未だ地域性は残り、それぞれの地域で独自の発展を遂げたため、中国全土でほぼ同様の形式の像が見られる状況には至らなかった。例えば敦煌莫高窟第3期諸窟の中、初唐時代にまで下る可能性がある第244窟では、第2期の如来坐像を一回り大きくしたような印象の上半身と、それに比して厚みのない下半身の像が出現した。そして細部まで同じ形式の像は、他のどの地域にも見られないので、敦煌莫高窟では鄴北斉仏教美術の影響を受容した後、第3期諸窟において独自の発展を遂げたことが理解される。

これはなにより、その時期仏教文化の核となる地域が存在しなかったことに起因する。6世紀後半、仏教美術をリードしてきた鄴が破壊され、その周辺地域では、隋時代に入ると鄴北斉形式のバリエーション的な像が造られ、中国全土を席卷するような新しい形式を創出することはなかったのである。

このような状況にあって、注目すべきが山東省青州雲門山石窟第1窟如来坐像である。臀部を前にずらし後方へ凭れ掛かる姿勢を採る形式の像は、山東地方を除くと多くは見られない。だが袈裟に包み込んだ両脚の膝を持ち上げ、裳懸座に刻まれた弧状の衣文が脚のラインを強調する形式は、青州市龍興寺趾出土造像や長清蓮華洞本尊などの山東地方の例以外にも、旧北周の領域、麦積山石窟第

14号窟に見つけられた。また敦煌莫高窟では第244号窟の壁画にこの形式の像が描かれ、これらはともに鉤紐式袈裟を纏っている。麦積山石窟第14号窟の造営年代を確定できないが、590年頃に造営された雲門山石窟第1窟よりは遅れる。すると旧北周の領域では隋時代後半になり、旧北齊の領域における隋前期の流行形式が、一部ではあるが採用されたことが知られる。果たしてこの形式が、旧北齊領域内のどこで開始したかは不明である。だが、山東地方でとくに流行した形式が、敦煌莫高窟や麦積山石窟に存在する以上、西安経由で旧北周の領域各地へ伝えられたと考えられる。

残念ながら、現在西安では隋の紀年銘を持つ如来像が、ほとんど存在しない。陝西省碑林博物館に所蔵される如来立像は、隋あるいは唐時代とされるものである。肉髻は盛り上がりで表現され、顔は方円形。全体に顆粒状の螺髪が刻まれる頭部は、身体に比して若干大きめである。胸をやや広く開けた通肩に袈裟を着け、その表面には段差により衣文が刻み出される。連続性がなく、下腹部を境に上下で形が異なる衣文の形式は、西域の仏像に祖形を辿れることが指摘され、また北周の造像と密接な関係を示している。

しかし忘れてならないのは、龍門石窟の初唐窟に、両膝を持上げて坐す形式の如来坐像が、多数見られる事実である。岡田健氏によると、「この特徴的な如来坐像の表現は、龍門石窟では660年代の主流になり、670年代いっぱいまで引き続き採用されている。それは、様式的には隋代以来連綿と続いていたものである」という。(またそれ以外にも、永青文庫所蔵の咸亨3年(627)銘阿弥陀像など、隋建国を契機として鄴北齊造像の形式が旧北周の領域に広がった様子が窺われる。隋時代に西安でさほど流行しなかったとしても、山東地方で590年頃に出現した形式が、660年代に首都西安と比肩する仏教美術の中心である龍門石窟の流行形式となったのである。つまり山東地方の隋造像は、他の地域の隋造像に先駆け初唐における流行形式を用意した。言い換えれば、山東地方の隋如来坐像こそ、中国全土における統一的な形式成立の第一歩を踏み出す役割を果たしたと言えるのである。

(2) 菩薩像

隋時代前期の菩薩像装飾は、華北地方の東と西、言い換えれば旧北齊の領域と旧北周の領域間で大きく形式を異にしていた。だが細部形式に着目すると、両者の間に共通形式を指摘できるので、両領域の間に影響関係があったと考えられる。特筆すべきは、菩薩のあるべき姿として、現実に存在しそうな高貴な人物をイメージすることが両者に共通していたことである。そして各地で、それぞれその

イメージに相応しいとされる形式を採用した。問題は、リアリティーや現実味を帯びさせるため、なぜこの時代、身体を華美に飾ることを必要としたかである。北周時代、その領域内で幼児を想起させる姿に造られた菩薩像は、隋時代に入り成人男性のような姿に変化した。これは頭部が身体に比べ大きいものの、幼児とは異なるプロポーションを採る北齊仏教菩薩像からの影響がきっかけになったためだと考えられる。一方、裸体に近く身体をあまり飾ることのない北齊造像の中から、諸城地区出土造像のような過剰な装飾の像が現れたのは、旧北周の領域から流入した情報に負うところが大きいに違いない。しかし北齊、北周美術の伝統が融合したことで、新たな菩薩像のイメージが形成されたとは考えにくい。

写実的な人体表現を備え、豪華な装飾で身体を飾り貴族のような高位の人物を思わせる姿で菩薩を表現する新たな流れは、中国全土で600年頃には定着した。四川地方を含む南朝仏教美術が、先駆的な役割を果たしたことは無視できない。隋菩薩立像の場合、瓔珞形式に見られるように、旧北周、旧北齊領ともに四川地方から強い影響を受けたものが存在し、前者に、より直接的な関わりを認めることができる。また北周末や北齊末にすでに、菩薩像を華美に飾ることが始まった可能性も否定できない。しかしなにより重要なのは、隋菩薩像が、架空の存在ではなく現実の肉体を備え、貴族のような装飾で身を包んだ人物として造形化されたことである。幼児ではなくリーダとしての風格を備えた像を必要としたのは、廢仏という経験により、強い指導力を持つ菩薩の姿が求められたことが大きかったに違いない。さらに隋前期という時代の華やかな雰囲気が、このような飾り立てられた像にリアリティーを持たせ、その流行に大きな影響を与えたと考えられる。

旧北齊の領域内でも、河南省安陽の大住聖窟、山東省の青州駱駝山石窟第5窟、また広饒などに「八」字形の瓔珞を備えた像が存在する。大住聖窟は開皇9(589年)に開かれたので、隋の全国統一時代に西安からの影響が旧北齊領域にまで届いていたことが知られる。しかしこの形式は、華北東部で主流とはならなかった。高位の貴族のような姿として菩薩を表現するという認識は、各地で共有されていたものの、西安の流行形式が、そのイメージを具現化する重要な形式となるには至らなかったのである。

以上の如来および菩薩の考察結果より、「隋初期仏教美術様式、形式」が、中国全土に統一的な仏教美術様式、形式が出現するための重要な下地となったと結論される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 八木春生 「敦煌莫高窟莫高窟隋窟に関する一考察」『中国考古学』第9号、日本中国考古学会、2009年133-154。査読有
- ② 八木春生 「西安隋前期の石造菩薩立像に関する一考察」『芸術研究報』29、筑波大学芸術学系、2008年23-34。査読有
- ③ 八木春生 「山東地方における北齊如来立像に関する一考察」『佛教藝術』293、毎日新聞社、2007年55-78。査読有

〔学会発表〕(計5件)

- ① 八木春生 「隋時代菩薩立像の装飾について」日本中国考古学会全国大会 2009年11月22日 筑波大学
- ② 八木春生 「敦煌莫高窟莫高窟隋窟に関する一考察」日本中国考古学会全国大会平成2008年11月22日 金沢大学

〔図書〕(計1件)

- ① 八木春生 根津美術館 『中国の石仏』2009年 91。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八木 春生 (YAGI HARUO)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
准教授

研究者番号：90261792

(2) 研究分担者

小澤 正人 (OZAWA MASAHITO)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：00257205